

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第75集

吉祥寺廃寺

伊豆の国市

令和5・6年度一般県道菰山伊豆長岡修善寺線
社会資本整備総合交付金（県道道路改築・一般）
事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2025

静岡県埋蔵文化財センター

序

吉祥寺廃寺は、現在の伊豆の国市南江間に所在したと伝えられる寺院です。吉祥寺の名は、延文元（1356）年の文書に初めて見え、寛永10（1633）年の段階で、鎌倉建長寺龍源庵の末寺であった記録を最後に歴史上その姿を失いました。

今回報告する発掘調査は、静岡県道129号菰山伊豆長岡修善寺線の拡幅等整備工事に伴うものでした。南北に縦走する道路の脇に設定された狭小な調査区からは、期待された中近世寺院に関連付けられる遺構・遺物の検出こそ乏しかったものの、古墳時代と平安時代の集落の一端が確認されたほか、縄文時代、弥生時代に比定される遺物も出土するなど、様々な時代・種類の遺跡が重なった姿が浮かび上がって来ました。

本書が、研究者・県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、本発掘調査にあたり、静岡県沼津土木事務所をはじめ、各関係機関の御理解と御協力をいただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

2025年3月

静岡県埋蔵文化財センター所長
横崎 浩一

例 言

- 1 本書は、静岡県伊豆の国市南江間に所在する吉祥寺庵寺の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、一般県道菰山伊豆長岡修善寺線社会資本整備総合交付金（県道道路改築・一般）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県沼津土木事務所の依頼を受け、静岡県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 本調査の期間及び面積は、次のとおりである。
現地調査 令和5年9月～令和5年12月 調査対象面積 421 m²
資料調査 令和6年8月～令和7年3月
- 4 調査体制は、次のとおりである。
令和5年度（現地調査）
所長 深井善一郎 次長兼総務課長 鈴木良二 調査課長 富樫孝志
総務課主査 浜武正樹 調査課調査班長 中川律子 主査 岩名建太郎（調査担当）
令和6年度（資料調査）
所長 横崎浩一 次長兼総務課長 岸本正貢 調査課長 富樫孝志
総務課主査 浜武正樹 調査課調査班長 中川律子 普及班長 大森信宏（保存処理担当）
主査 岩名建太郎（調査担当）
- 5 本書の執筆は、第5章を株式会社バレオ・ラボ竹原弘展、高木康裕が行い、それ以外は、岩名が行った。
- 6 本書の編集は、静岡県埋蔵文化財センターが行った。
- 7 発掘調査における業務委託は、以下のとおりである。
発掘調査支援業務委託 有限会社バル文化財研究所
整理作業・保存処理業務委託 株式会社フジヤマ
自然科学分析委託（石材産地同定） 株式会社バレオ・ラボ
- 8 調査にあたり、以下の方々から御指導・御助言を賜った。厚くお礼申し上げる。
島田章広 渡井英誉（五十音順・敬称略）
- 9 本報告書に係る出土遺物及び実測図、写真等の記録は、静岡県埋蔵文化財センターで保管している。

凡 例

- 本報告書の記載については、次の基準により統一を図った。
- 1 遺構・遺物等の位置を表す座標は、すべて平面直角座標第Ⅷ系を用いた国土座標、世界測地系を基準とした。
 - 2 調査区の方眼設定は、上記の国土座標を基準に設定した。
(X = -105,060.000 Y = -39,480.000) = (A, 0)
 - 3 土層、土器・土製品の色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帳』（農林水産省技術会議事務局監修 1992）を使用した。
 - 4 第2章第2節の周辺遺跡分布図（第4図）は、国土地理院発行 1 : 50,000 地形図「沼津」を複写し、加工・加筆した。

目 次

序 例言 凡例

第1章 調査概要

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	
1 現地調査	2
2 資料調査	4

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6

第3章 調査の成果

第1節 土層と地形	11
第2節 各調査区の遺構・遺物	
1 1-1区	14
2 1-2区	15
3 2-1区	18
4 2-2区	20

第4章 まとめ

第1節 江間微高地上の遺跡の展開について	25
1 縄文時代	25
2 弥生時代	25
3 古墳時代	25
4 古代	25
第2節 吉祥寺廃寺推定所在地周辺の地割りと遺構配置について	25
第3節 中世緇銭の構成について	28

第5章 吉祥寺廃寺出土の黒曜石製石器の産地推定

写真図版

抄録

挿図目次

第1図	遺跡位置図	1	第11図	1号溝平・断面図	16
第2図	調査区配置図	3	第12図	1-2区出土遺物実測図	17
第3図	周辺地形分類図	5	第13図	2号溝平・断面図	19
第4図	周辺道跡分布図	7	第14図	1号井戸平・断面図	19
第5図	1区平・断面図	12	第15図	2-1区出土遺物実測図	20
第6図	2区平・断面図	13	第16図	2-2区出土遺物実測図	22
第7図	1号土坑平・断面図	14	第17図	中・近世遺構配置・現在土地区画比較図	27
第8図	1-1区出土遺物実測図	15	第18図	黒曜石産地分布図（東日本）	29
第9図	1号堅穴建物跡遺物出土状況図	16	第19図	黒曜石産地推定判別図1	31
第10図	2号堅穴建物跡平面図	16	第20図	黒曜石産地推定判別図2	32

挿表目次

第1表	周辺道跡分布図掲載地名一覧表	8	第6表	緒言構成表	28
第2表	出土土器観察表	23	第7表	分析対象	29
第3表	出土石器観察表	23	第8表	東日本黒曜石産地の判別群	30
第4表	出土銭貨観察表	24	第9表	測定値および産地推定結果	30
第5表	周辺道路平面角度一覧表	28			

挿写真目次

写真1	重機による表土掘削作業状況	4	写真3	出土品実測作業状況	4
写真2	人力による掘削作業状況	4	第4表	報告書編集作業状況	4

写真図版目次

図版1	1	1-1区全景（画面上が北）	図版4	1	2-1区	1号井戸完掘状況（西から）
	2	1-2区全景（画面上が北）		2	2-1区	1号井戸内ステップ状掘り込み（西から）
図版2	1	2-1区全景（画面上が北）		3	2-1区	1号井戸内ステップ状掘り込み（南西から）
	2	2-2区全景（画面上が南）		4	2-1区	2号溝完掘状況（南東から）
図版3	1	1-2区	2号堅穴建物跡、1号溝（南西から）	図版5	1-1区	出土遺物
	2	1-2区	1号堅穴建物跡遺物出土状況（南東から）		1-2区	出土遺物
	3	1-2区	1号堅穴建物跡床面検出状況（南東から）	図版6	2-1区	出土遺物
	4	1-1区	1号土坑覆土堆積状況（北東から）	図版7	2-2区	出土遺物

第1章 調査概要

第1節 調査に至る経緯

静岡県道129号菰山伊豆長岡修善寺線（以下、菰山伊豆長岡修善寺線）は、伊豆の国市原木に所在する国道136号原木交差点を起点とし、伊豆市瓜生野で再び国道136号に合流する、路線延長12.346kmの一般県道である。

路線の大部分（石堂橋以西）は、狩野川左（西）岸側を走り、伊豆市－伊豆の国市境界（狩野川大橋）から右（東）岸側を北上する国道136号本道と並走する位置関係にある。

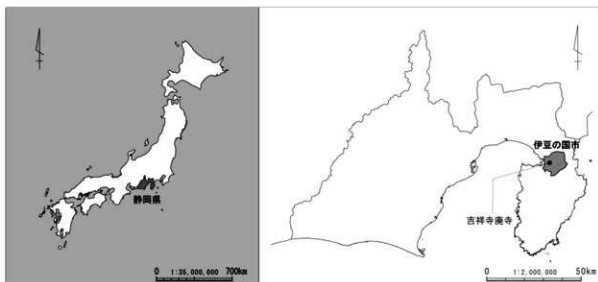
伊豆の国市を走る菰山伊豆長岡修善寺線の内、静岡県道134号静岡菰山停車場線交差点（豆塚神社前交差点）と同131号古奈伊豆長岡停車場線交差点（古奈交差点）間で、令和3年度に実施された全国道路・街路交通情勢調査では、平日昼間12時間の上下合計車両通行量7,477台、24時間交通量9,107台との結果が出た。

地域の幹線道路としての役割を担う中で、対面ですれ違う通行車両や道端の歩行者に対して注意が特に必要であったり、視距の確保に難があると判断される箇所が点在していたため、その解消が求められた。

静岡県沼津土木事務所（以下、沼津土木事務所）は、そのような箇所について、道路隣接地を用地として確保した上で、歩道設置を含めた道路改築計画を進め、伊豆の国市南江間内の延長250mの区間について、道路幅員を従来の5.6mから9.5m（歩道部含む）に拡幅する工事業を令和3年度から開始した。

当事業施工箇所は、周知の埋蔵文化財包蔵地である吉祥寺廃寺の登録範囲内に含まれており、令和4年9月に静岡県スポーツ・文化観光部文化局文化財課（以下、文化財課）が確認調査を実施し、埋蔵文化財に対して工事影響のある箇所を特定した。

この結果を受け、沼津土木事務所と文化財課の協議により、当該箇所について、令和5年度に静岡県埋蔵文化財センターが記録保存のための本発掘調査を受託・実施することとなった。



第1図 道跡位置図

第2節 調査の方法と経過

1 現地調査

(1) 調査区の設定 (第2図)

令和4年度文化財課実施の確認調査で、埋蔵文化財が検出された2施工箇所について調査区を設定した。既存道路の東側に位置する用地 210.91 m² (伊豆の国市南江間宗門 314 番 3・4 号) を1区、西側用地 209.85 m² (同字吉城寺 310 番 4・5 号) を2区とした。発掘作業で発生する排土の処理について、用地確保及び周辺交通事情の制約により場外搬出の手段が採れなかったため、各調査区を南北二分(以下、1区の北部を1-1区、同南部を1-2区、2区の北部を2-1区、同南部を2-2区と呼称する)し、その片側に掘削排土を仮置きする反転調査法を実施した。

(2) 調査の実施方法

現地調査では、調査担当職員は、調査全体の計画と調整、現地の遺跡状況等の評価と判断を行い、掘削業務(掘削作業、基礎整理作業、仮設工等)と遺跡測量業務(基準点測量、遺構実測、空中写真撮影等)を合わせて発掘調査支援業務として委託した。

(3) 調査経過

現地発掘調査は、令和5年8月17日より本格的に準備工を開始し、令和6年12月13日に撤収工を完了した。各調査区の作業工程は、以下のとおりである。

ア 1-1区

9月11日より表土除去開始。9月22日より人力掘削作業開始。10月17日空中写真撮影。10月20日より埋め戻し作業開始(10月24日まで)。

イ 1-2区

10月25日より表土除去開始。10月31日より人力掘削作業開始。11月27日空中写真撮影。11月28日より埋め戻し作業開始(12月1日まで)。

ウ 2-1区

10月25日より表土除去開始。10月31日より人力掘削作業開始。11月27日空中写真撮影。11月28日より埋め戻し作業開始(12月1日まで)。

エ 2-2区

9月11日より表土除去開始。9月14日より人力掘削作業開始。10月17日空中写真撮影。10月18日より埋め戻し作業開始(10月19日まで)。

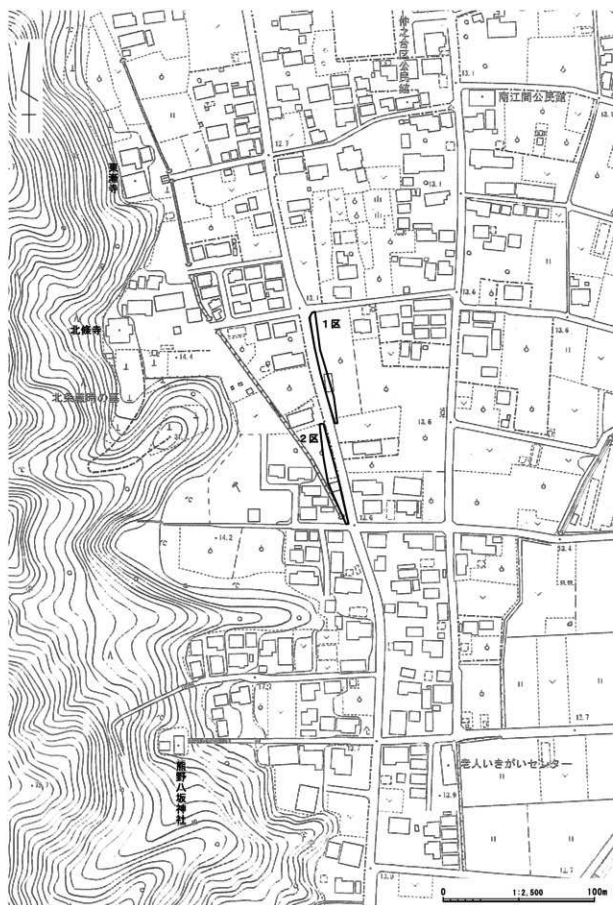
(4) 掘削作業の方法

調査区周囲に約2m間隔で鉄パイプを打設し、立入禁止・危険標識を付けたロープを巡らせ、場内侵入防止を図るとともに、畑地・住宅地対面側に防塵シートネットを張り、土埃の飛散防止に努め、道路側の鉄パイプ頭頂には、工事保安灯を設置して、夜間通行者に対し注意喚起させるなどの安全対策を実施した。

各調査区は、幅が比較的狭く、通行量の多い道路に隣接し、通行者と作業箇所の距離が近くなることから、表土除去、排土移動運搬・整形に使用する重機は、平爪を装着した小旋回型の小型バックホウ(バケット容量0.1m³)を選択した。

遺物包含層掘削、遺構検出・掘削は、人力で行い、状況に応じて、スコップ、鋤簾、両刃鎌、移植鋤等の掘削器材を選択した。発生した排土は、重機が待機する仮置き場まで小車で運搬した。

出土遺物については、調査区・遺構・層位別に一括取り上げを基本としたが、一部の遺構内検



第2図 調査区配置図

出遺物については、光波測距儀を用い、三次元位置情報を記録し取り上げた。

(5) 記録作業の方法

幅が狭いため、実掘削される調査区内に測量用杭・鉤の設置をせず、各区、通行に影響の無い、見通しの効く外縁部に光波測距儀を設置し、遺構実測等の測量作業を行った。

(6) 基礎整理作業

金属製品を除く出土品は、水洗・乾燥後、遺跡取略号とともに取り上げ番号を注記した。撮影画像と実測図面については、各々、収納と台帳の作成を行った。

2 資料調査

(1) 調査の実施方法

資料調査は、令和6年度に実施した。調査担当職員は、全体計画の管理、委託業者の作業内容監督、現地調査結果の評価・判断の再検討、報告書の執筆などを行った。資料整理作業、報告書刊行作業及び保存処理に関わる各作業は、合わせて業務委託をした。また、自然科学分析を伴う石器石材の産地同定については、専門業者に委託した。

(2) 資料調査の経過

出土品は、仕分け・分類の後、必要な土器類については、接合・復原、金属製品については、保存処理を行った。この内、報告書掲載対象物について実測、採拓、写真撮影を実施し、これらの成果物をパソコン上で編集し、遺物図版、遺物写真図版を完成させた。



写真1 重機による表土掘削作業状況



写真2 人力による掘削作業状況



写真3 出土品実測作業状況



写真4 報告書編纂作業状況

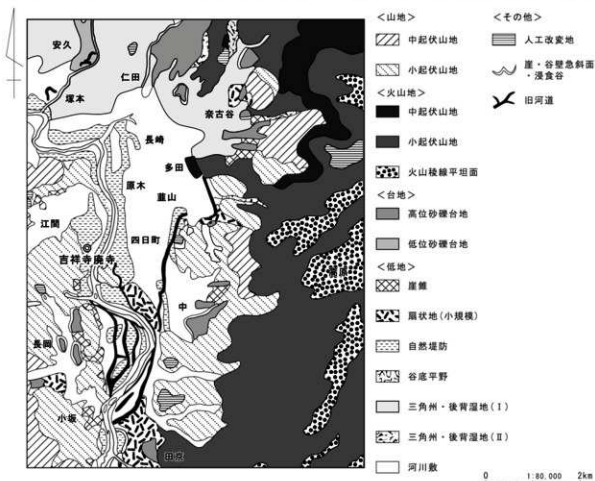
第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

伊豆半島北部域は、海底火山噴出物である第三紀層を基盤とし、富士火山帯に連なる、第四紀火山が、大きく二列東西に配された地勢をしており、その中央では、当該地域の降水を源とする支川を集めた狩野川が北方向へ流下している。

狩野川下流の北側に広がる平野は、愛鷹山・箱根山間の谷に富士山溶岩（三島溶岩／約1万年前）が流れ込んだのち、縄文海進・海退を経て、富士山の山体崩落により発生した火山砂礫層（御殿場泥流／約2,900年前）の被覆により形成された扇状地（三島扇状地）の端部に当たっており、狩野川中流域平野部との間に生じる比高差によって、狩野川の流れを南西側へと圧している。

その影響を受けるかたちで、狩野川中流左岸の静浦山地（新第三系白浜層群の凝灰岩を主体とした地層からなる。通称沼津アルプス）の尾根に挟まれた谷戸部分は、各々、滞水しやすい環境にあり、後背湿地が形成され、後々、水耕地や溜池として利用されるようになる。北側に大平山（356 m）、金山（219 m）、若宮山（145 m）、大嵐山（函南町側の地元呼称は、日守山。191 m）、茶臼山（128 m）の連峰と、南側の大男山（207 m）によって挟まれた現伊豆の国市北江間地区もまた、東高西低の後背湿地（以下、



第3図 周辺地形分類図

江間低湿地)が形成されている。

大男山(その支峰の谷戸山・巨徳山)の北東～東麓裾部沿いには狩野川溢流堆積物により形成された自然堤防(以下、江間微高地)が、江間低湿地と狩野川の繋がり扼するかのような広がりを見せる。その天端では、過去より当該地域の主たる集落部が展開している。

吉祥寺廃寺の周知の埋蔵文化財包蔵地としての登録範囲は、大男山(谷戸山・巨徳山)東麓裾部の小谷戸とその東側に接した江間微高地南部を含んだものとなっている。

第2節 歴史的環境

江間微高地上では、弥生時代以前の明確な集落跡は、確認されていない。古墳時代から歴史時代に至る集落展開を考察する材料となる遺跡として、北から南へ花ノ木遺跡(第4図79)、町屋遺跡(同93)、窯の壇遺跡(同103)が連なって分布しているが、過去の発掘調査実施範囲は、限定的であり、各々の遺跡の境界は、不明瞭である。

花ノ木遺跡は、昭和31(1956)年に耕地整理事業中に多量の土器、土鍾1個、焼土2箇所が発見されたことを契機に東西3.32m、南北1.39mの範囲が緊急発掘され、古墳時代の土師器の集積のほか、ガラス小玉5個、壺の中などから白玉30個などが出土した。

当初、密度の高い遺物集中の状態から、窯場倉庫、売場と推定され、遺跡の性格は、特殊生産遺跡であると想定されていたが、調査地点の状況については、遺物の構成により、集落内祭祀の場である可能性が指摘されている。

町屋遺跡は、現在の江間地区集落部の中心部に位置する。登録範囲の最西部、式内社石徳高神社の後継社と目される豆塚神社敷地内には、円墳である豆塚古墳(第4図92)が単独で所在している。

なお、登録範囲の南部に当たる、現在、江間公園となっている区画(旧江間小学校、伊豆箱根鉄道グランド跡地。東西約70m×南北約100m)は、中世初期に鎌倉幕府二代目執権北条義時の館があったと伝えられているが、それを背負させる遺構・遺物は、確認されていない。

窯の壇遺跡は、昭和31(1956)年に土地改良事業工事中に古代の須恵器の窯跡が発見され、調査された。元々、東側の狩野川へ向う緩傾斜面に構築されたとみられている。

また、遺跡登録範囲図東部で、昭和52(1977)年、当時、鳥井前遺跡と呼称された遺跡範囲の発掘調査(調査面積150㎡)では、古墳時代前期から平安時代の堅穴建物跡が8軒検出されていて、長期にわたる集落の営為が窺われた。

江間低湿地では、本来、周辺山地が集めた降水の流れが狩野川のある東側に向かうべきところであるが、江間微高地によって出水口を閉塞された地形のため、水捌けの悪い土地となっており、事実、その西部域の標高は、狩野川水面より低く、確認されている遺跡の分布は、希薄である。

それでも江間低湿地のほぼ中央に位置する八ツ島遺跡(第4図91)では、溝状遺構が検出され、古墳時代初頭とみられる大量の木製品が出土している。

江間低湿地の北縁側、静浦山地の内、大平山から大嵐山の南麓部は、古墳時代後期以降、墓域が広がっている。6世紀後半から7世紀前葉の須恵器が出土している箱根山古墳群(第4図78)が先行した後、複数の支群から成り、総数100基を超える、北江間横穴群と総称される横穴墓群が後続する(同75～77・88～90)。

当該横穴墓群は、出土した須恵器の年代観より、7世紀中葉に始まり、7世紀後葉より8世紀前半に隆盛を迎えたとみられる。一部を除いて国史跡に指定されており、この内、大師山1・2・8号横穴に

は、石棺が据えられ、大北 10・14・17・24・27・29・30・34 号、大師山 1 号、割山 6 号横穴には、石櫃が置かれていた（大北 24 号横穴の例は、「若舍人」の印刻を持つ）。

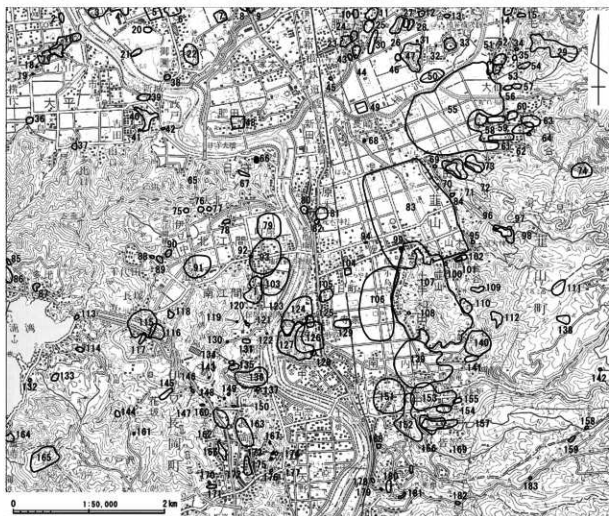
なお、ほぼ同時期、静浦山地の周縁では、大嵐山から茶臼山の北麓部に政戸境横穴群（同 42）、岩崎横穴群（同 66）、日守中里横穴群（同 67）、徳倉山北東麓に杉沢横穴群、江浦湾に面する鷺津山南麓には、江浦横穴群（同 86）等の比較的数的規模（二桁台）のある横穴墓群が展開している。

今回の調査対象となる遺跡の名称の由来となった吉祥寺は、山号は、「瑞竜山」で、寺格は、諸山に列していた臨済宗寺院である。今も南江間地区に残る、同じく臨済宗寺院である東漸寺、北條寺は、吉祥寺の塔頭であったとされ、北條寺には、吉祥寺に関わる記録も残る。

元禄 15（1702）年に成立した「本朝高僧伝」によると、吉祥寺は、関東十刹である鎌倉法泉寺を開き、建長寺、寿福寺の住持となった素案了堂（1292 年生、1360 年没。諡号は、本覚禪師）の開山とされる。

15 世紀後葉の成立と推定される「鎌倉大草紙」では、伊豆国守護であった畠山（阿波守）国清（生年不詳。1362 年頃没か）と其息尾張守が開基とされる。

具体的な建立時期の記録は、無いが、吉祥寺の住持が三嶋社の塔婆・三昧堂の造営を命じられた、延文元（1356）年 8 月 13 日「伊豆守護畠山国清書状」が最古の実年が書かれた記録となる。同 2（1357）年 8 月 21 日、鎌倉公方足利基氏は、畠山義深、清義、国熙の三兄弟（各人、国清の弟）の申請により、武蔵国万吉郷（現埼玉県熊谷市内）の岩松治部大輔の跡地を寄進している。また、北條寺文書に残る記録では、応安 3（1370）年 9 月 2 日に、国熙が父の家国、兄の国清の菩提を弔うため、伊豆国中島郷（現



第 4 図 周辺遺跡分布図

第1表 周辺道路分布図掲載地名一覧表

	包蔵地登録名称	時代	種類		包蔵地登録名称	時代	種類
1	吉祥寺塚寺	中世	社寺跡	51	久根ヶ崎道路	旧石器、縄文、弥生	集落跡
2	北ノ前道路	弥生、平安	散布地	52	城ヶ下道路	縄文、弥生、古墳	散布地
3	長伏道路	弥生、古墳、平安、中世	散布地、集落跡、城館跡、古墳、その他の墓、その他	53	神明原道路	弥生、古墳、中世	散布地、集落跡
4	中ノ坪道路	弥生、古墳、奈良、平安、中世	散布地	54	浮名古墳群	古墳	古墳
5	志保田道路	古墳、その他	散布地	55	奈谷谷低地道路群	弥生、古墳	その他
6	下ノ屋道路	古墳、奈良、平安、中世、近世	散布地	56	花ヶ崎道路	縄文、弥生、古墳	散布地
7	安久六反田道路	古墳、奈良、平安、中世、近世	散布地	57	御蔵沢道路	縄文、弥生、古墳	散布地、集落跡
8	多呂ノ前道路	古墳、平安、中世	集落跡	58	御蔵沢古墳群	古墳	古墳
9	姫込道路	古墳、中世	散布地	59	宮原A遺跡	縄文、弥生、古墳	集落跡
10	仁田坂道路	弥生、古墳	散布地	60	宮原B遺跡	縄文、弥生、古墳	散布地、集落跡
11	大土肥坂道路	古墳	散布地	61	花立道路	縄文、弥生、古墳	散布地
12	若宮道路	古墳	散布地	62	神崎道路	旧石器、縄文、弥生、古墳、奈良、平安	集落跡、その他の墓
13	蔵ヶ塚道路	古墳	散布地	63	国清寺	中世、近世	社寺跡
14	館道路	縄文、弥生、古墳	散布地	64	国清寺北古墳群	古墳	古墳
15	前田道路	弥生	散布地	65	国清寺南古墳群	縄文、古墳	散布地、古墳
16	出城山城跡	その他	城館跡	66	日守下ノ谷戸横穴	古墳	横穴墓
17	出城山城郭	中世	城館跡	67	岩崎道路	縄文	散布地
18	松下横穴群	古墳	横穴墓	68	岩崎横穴群	古墳	横穴墓
19	松下横穴群	古墳	横穴墓	69	日守中里横穴群	古墳	横穴群
20	灰塚道路	弥生、古墳	集落跡	70	長崎神社	弥生	散布地
21	大正面道路	弥生、古墳	集落跡	71	熊野神社	弥生、古墳、奈良	散布地、集落跡
22	道越道路	弥生、中世、近世、その他	その他の墓、その他	72	大塚古墳群	古墳	古墳
23	仁田館跡	中世	城館跡	73	妹ヶ久保道路	古墳	集落跡、古墳
24	五反田道路	弥生、古墳	散布地	74	芋ヶ塚古墳群	古墳	古墳
25	町屋道路	縄文、弥生、古墳、奈良	集落跡	75	芋ヶ塚遺跡	弥生、弥生、古墳	散布地、その他の墓
26	寺尾原道路	縄文、弥生、古墳、奈良、平安	集落跡	76	授福寺	中世	社寺跡、その他の墓
27	寺尾西道路	弥生、古墳	散布地	77	北江間（大北西）横穴群	古墳、奈良	横穴墓
28	寺尾道路	弥生、古墳	散布地	78	北江間（大北東）横穴群	古墳、奈良	横穴墓
29	大仙山城跡	中世	城館跡	79	北江間（大風）横穴群	古墳、奈良	横穴墓
30	宮下遺跡	古墳	散布地	80	箱根山古墳群	古墳	古墳
31	木戸古墳	古墳	その他の墓	81	花ノ木道路	古墳、奈良	生産遺跡
32	幸天道路	弥生	散布地	82	原本下町遺跡	弥生	散布地
33	柏谷城跡	近世	城館跡	83	荒真木道路	古墳	散布地
34	打越道路	弥生	散布地	84	荒真木神社	古墳	散布地
35	浜井堀古墳群	古墳	古墳	85	山木道路	弥生、古墳、平安、中世	集落跡、社寺跡、生産遺跡
36	丸山道路	弥生、古墳	集落跡	86	口論塚道路	旧石器、縄文、中世	散布地、集落跡、その他の墓
37	大瀬前道路	古墳	集落跡	87	江浦古墳群	古墳	古墳
38	御園道路	弥生	散布地	88	江浦横穴群	古墳	横穴墓
39	大平新城館跡	弥生、古墳、中世	集落跡、城館跡、その他の遺跡	89	多比横穴群	古墳	横穴墓
40	大平新城跡	中世	城館跡	90	北江間（東側）横穴群	古墳、奈良	横穴墓
41	南蔵横穴群	古墳	横穴墓	91	北江間（割山）横穴群	古墳、奈良	横穴墓
42	政戸塚横穴群	古墳	その他の墓	92	北江間（横根沢）横穴群	古墳、奈良	横穴墓
43	路免道路	古墳	集落跡	93	八ツ島道路	古墳、平安、中世	生産遺跡
44	比丘尼塚道路	縄文、古墳	集落跡	94	豆塚古墳	古墳	古墳
45	比丘尼塚古墳	古墳	その他の墓	95	町屋道路	縄文、弥生、古墳	散布地
46	上正方道路	弥生	散布地	96	道下道路	平安、中世	散布地、その他
47	松ヶ崎道路	古墳	その他	97	下向山道路	中世	その他の墓
48	向原道路群	縄文、弥生、古墳	集落跡				
49	肥田館跡	中世	城館跡				
50	池之反道路	弥生	散布地				

第1表 周辺道路分布図掲載地名一覧表

	包蔵地登録名称	時代	種類		包蔵地登録名称	時代	種類
96	太閤陣場古墳	古墳	古墳	138	薬師堂口遺跡	縄文	散布地
97	滝の洞遺跡	縄文、弥生、古墳	散布地	139	内中遺跡	縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中世	散布地、集落跡
98	太閤陣場付城跡	中世	城館跡	140	昌深院付城跡	中世	城館跡
99	兵衛ノ森遺跡	弥生、古墳	集落跡	141	山田古墳群	古墳	古墳
100	横宿遺跡	近世	散布地、その他の遺跡	142	中ノ沢遺跡	旧石器	散布地
101	山本館	中世	城館跡	143	上耕地山横穴	古墳、奈良	横穴墓
102	山木下町遺跡	弥生、古墳	散布地	144	大塚山遺跡	縄文	散布地
103	窯の横遺跡	古墳、奈良、平安	集落跡、生産遺跡	145	花坂島橋古墳址	奈良、平安	生産遺跡
104	木戸稲荷付城跡	中世	城館跡	146	花坂横穴	古墳	横穴墓
105	正念寺遺跡	古墳、中世	社寺跡、その他の遺跡	147	屋敷台家跡群	奈良	生産遺跡
106	経ヶ島遺跡	弥生、古墳	散布地、その他	148	牛ヶ洞遺跡	平安、中世	生産遺跡
107	釜山城跡	中世	城館跡	149	白坂山横穴	古墳、奈良	横穴墓
108	和田遺跡	中世	城館跡	150	洞古墳	古墳	古墳
109	本立寺付城跡	中世	城館跡	151	坂本遺跡	弥生、古墳、奈良、平安、近世	散布地、集落跡
110	追越山付城跡	縄文、中世	城館跡	152	皆沢低地遺跡	弥生、古墳	その他
111	荒ヶ台遺跡	縄文	散布地	153	宮下遺跡	弥生、古墳	その他の遺跡、その他
112	上山田付城跡	中世	城館跡	154	台古墳群A群	古墳	古墳
113	洞横遺跡	縄文、古墳	集落跡	155	宮ノ後遺跡	縄文、弥生	散布地、集落跡
114	宮の前後遺跡	縄文	集落跡	156	長者ノ原遺跡	旧石器、縄文、弥生、古墳	散布地
115	長塚遺跡	弥生、古墳	その他の遺跡	157	台古墳群B群	古墳	古墳
116	珍野遺跡	縄文、弥生、古墳	散布地	158	梅ノ木沢北遺跡	縄文	散布地
117	三度入り遺跡	縄文	散布地	159	梅ノ木沢南遺跡	縄文	散布地
118	湯ヶ洞山遺跡	縄文、古墳	散布地	160	竹ノ鼻遺跡	古墳、奈良	横穴墓
119	板ヶ平B横穴群	古墳、奈良	横穴墓	161	戸沢遺跡	奈良	生産遺跡
120	板ヶ平A横穴群	古墳、奈良	横穴墓	162	榎木遺跡	弥生、古墳、奈良、平安	散布地、その他の遺跡
121	釜石場遺跡	古墳	散布地	163	田原古墳群	古墳	古墳
122	四反畑遺跡	奈良、平安、中世	生産遺跡	164	小城山城跡	中世	城館跡
123	北條氏館跡	古墳、奈良、中世	城館跡	165	重寺城跡	中世	城館跡
124	御所之内遺跡	弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世	その他の遺跡	166	別所遺跡	縄文、弥生、古墳、中世	集落跡、古墳
125	光照寺	中世、近世	城館跡	167	源氏山（寺町洞）横穴群	古墳、奈良	横穴墓
126	願成院跡	奈良、平安、中世	社寺跡、その他の遺跡	168	大間洞古墳群	古墳	古墳
127	守山館跡	中世	城館跡	169	皆沢日向古墳	古墳	古墳
128	満願寺跡	縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世	社寺跡	170	丸山古墳群	古墳	古墳
129	池田遺跡	古墳、平安	散布地	171	入道遺跡	縄文、弥生、古墳、中世	散布地
130	芳山横穴群	古墳・奈良	横穴墓	172	高天ヶ原遺跡	縄文、弥生、古墳	散布地
131	御文馬場遺跡	縄文	散布地	173	源氏山（細洞）横穴群	古墳、奈良	横穴墓
132	鳥城付横穴	古墳	横穴墓	174	源氏山（法法院）横穴群	古墳、奈良	横穴墓
133	神橋遺跡	奈良、平安	集落跡	175	源氏山（多門山）横穴群	古墳、奈良	横穴墓
134	堀之上横穴群	古墳、奈良、平安	横穴墓	176	源氏山（岩倉）横穴群	古墳、奈良	横穴墓
135	堀之上横穴群	古墳、奈良、平安	横穴墓	177	若宮経塚	中世	その他
136	堀之上遺跡	弥生、古墳	その他の遺跡	178	横山段遺跡	平安	散布地
137	谷戸洞横穴群	古墳	横穴墓	179	横山段横穴群	古墳	横穴墓
	堀之上横穴群	古墳、奈良、平安	横穴墓	180	横山段古墳群	古墳	古墳
				181	宗光寺横穴群	古墳	横穴墓
				182	門下遺跡	平安	散布地
				183	御屋敷遺跡	平安、中世	散布地

静岡県三島市内)の地頭職半分を寄進している。

近世に入り、寛永10(1633)年、「相州鎌倉建長寺末寺帳」に建長寺竜源庵の末寺であることが記載されているが、その後、記録が途絶え、寛政12(1800)年編纂の「豆州志稿」に廃絶していることが記載されている。

北條寺の南側には、宗門、吉城山、吉城寺、御堂ノ山の小字名が残っており、寺域の名残を見せることから、当該地一帯が吉祥寺の比定地と目されている。

当該地域では、明暦元(1655)年に江間微高地を南北に縦断し、江間低湿地の縁部を巡る農業用水が整備された。江間用水と呼称される。旧天野村地先の狩野川に石堰(江間堰)を築き、水を溜め取水し、小坂、長岡、古奈、堀之上を経て江間へと至る。

当時の取水口から南江間村までは、およそ1里あり、南江間村内で二又に分流する(この箇所は、今回の吉祥寺廃寺発掘調査2区の南側隣接地に相当する)。南江間村分水から打塚まで(北江間村内堀)は、1,828間(約3.3km)、南江間村分水から珍野老町田まで(南江間村内堀)は、1,908間(約3.4km)を測った。

寛文9(1669)年には、拡張工事が実施され、従来4尺幅であったものが、2尺広げられ、6尺幅となって水量確保が図られた。

なお、北江間村内堀に相当する水路は、現在の菰山伊豆長岡修善寺線拡張に合わせ、地下に走る暗渠へと更新されている。

第3章 調査の成果

第1節 土層と地形

今回の調査実施箇所は、第2章で述べたとおり、狩野川左（西）岸の溢流堆積物によって形成された、自然堤防上面に当たる。

基本的な土層は、主に粘土、シルトから成り、その混合比率と色調を変えながら重畳する。

前日の天候の影響によって量の変化があるが、層差問わず、地表下1mを超えた深度になると、地下湧水が発生する。

最深部でも現地地表下1.3m程度に止まる、比較的浅い層位限定の所見であるが、攪乱層下の自然堆積層は、狩野川の流下方向とは反対に、全体的に北から南へと緩やかに下っており、狩野川氾濫によって、直接、被覆した土砂がそのままの位置で留まったというよりも、調査区より北側で溜まった土砂が南側へ流れてきたような印象が持たれる。

調査区間で若干距離があるため、基本土層の設定は、各区毎に行ったが、土相と検出高の比較から、1区第7層と2区第8層は、同一の連続する土層である可能性が高い。

1 1区の土層（第5図）

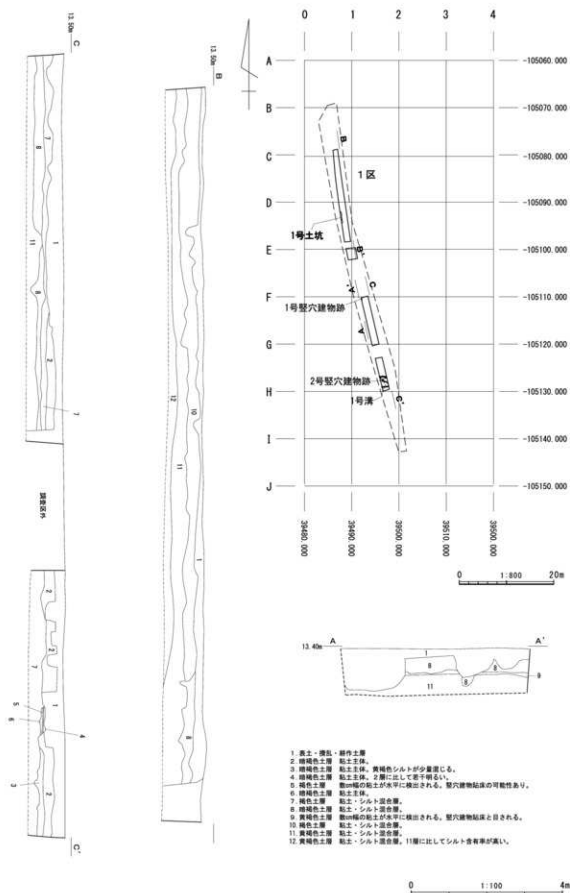
表層は、現代の畑耕作による攪乱土で、そのほぼ直下、第7層上面が古代、第11層上面が古墳時代以降の遺構検出面となるが、散漫に入る耕作の深堀り痕が遺構検出を困難にし、調査区境界壁の土層断面の観察から遺構の特定を行った箇所がある。

第10層中から少量の土師器細片が出土されたが、具体的年代の特定は、出来なかった。

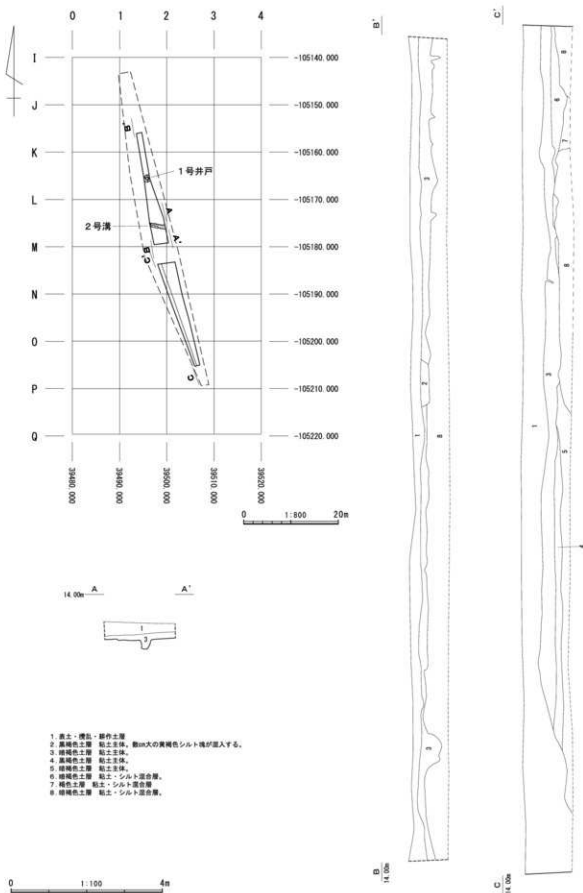
2 2区の土層（第6図）

2-2区北部及び中央以南の調査区境界壁の土層断面で落ち込みが観察される。これは、人為的な掘削によるものではなく、西側丘陵部より連なる、（東側の）狩野川へ走る小開析、または、沢の横断面と目される。

北部の落ち込み堆積土（第6層）からは、古墳時代、2-2区中央以南の落ち込み堆積土（第5層）からは、縄文・平安時代に比定される遺物が出土している（第2節4参照）。



第5図 1区平・断面図



第6図 2区平・断面図

第2節 各調査区の遺構・遺物

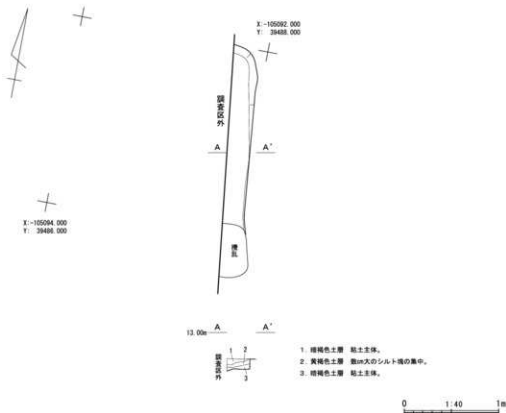
細分された調査区間で、各々の関係性が問える調査所見を得ることが出来なかったため、以下、各調査区別に検出遺構・出土遺物の記述を行う。

1 1-1区

1区の北部に相当する。上層は、畑耕作により攪乱されているほか、南端部では、大きな攪乱（近・現代に使用された、壁・床がコンクリート製の発酵肥料生成用箱形室が据えられていた。その内部には、動物遺体等有機物のほか20世紀初頭に比定される常滑産道明寺甕片が遺棄されていた）が深く下層に及んでいた。

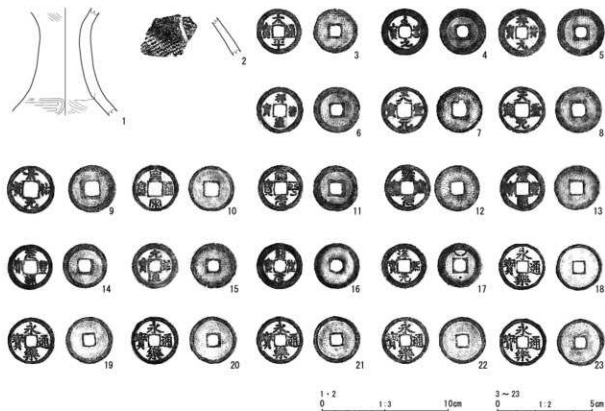
(1) 遺構 当該区で検出された遺構は、土坑1基（1号土坑）のみである。

1号土坑（第7図）は、調査区境界の制約により、一部の検出に限定された。南東隅が現代の攪乱（電信柱設置坑）により失われているが、南北辺長2m程度の平面方形または、長方形を呈する底面が平坦な土坑とみられる。遺物の検出は、認められなかった。近・現代攪乱層直下で検出され、覆土の様相が、1-2区検出の古代遺構覆土と様相が異なることと、遺構の主軸方向（第4章第2節参照）から、構築・使用時期は、近世以降と推定した。目的・性格は、不明である。



第7図 1号土坑平・断面図

(2) 遺物 (第8図 1~23) 1・2は、弥生時代中期に比定される壺の一部である。表土攪乱層中より発見された。1は、頸部に相当する。外面は、上位に斜方向のハケ調整、中位にナデ調整、下位に四角形区画文が認められる。2は、肩部上位に相当する。原体LRの単節縄文を施した後、竹管外皮を用いた沈線文を弧状に施す。



第8図 1-1区出土遺物実測図

3～23は、中世に比定される渡来銭貨であり、3～16は、北宋銭、17は、南宋銭、18～23は、明銭である。近・現代箱形室の北側裏込め土（攪乱土）内より、合計21枚の銭貨が褶状に重なり、錯着している状態で発見された。3は、太平通寶（初鑄976年）、4は、至道元寶（初鑄995年）、5は、祥符元寶（初鑄1008年）、6は、祥符通寶（初鑄1009年）、7・8は、天聖元寶（初鑄1023年）、9は、景祐元寶（初鑄1034年）、10は、皇宋通寶（初鑄1039年）、11は、治平元寶（初鑄1064年）、12は、熙寧元寶（初鑄1068年）、13・14は、元豐通寶（初鑄1078年）、15は、元祐通寶（初鑄1086年）、16は、紹聖元寶（初鑄1094年）、17は、淳熙元寶（初鑄1174年）、18～23は、永樂通寶（初鑄1408年）である（なお、緡銭の構成についての考察は、第4章第3節に記す）。

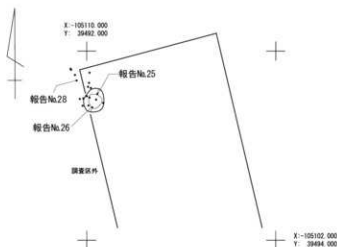
2 1-2区

1区南部に相当する。近・現代畑耕作による攪乱が遺構検出面に及ぶため、遺構掘方線を明確に把握することが出来ない場合があった。

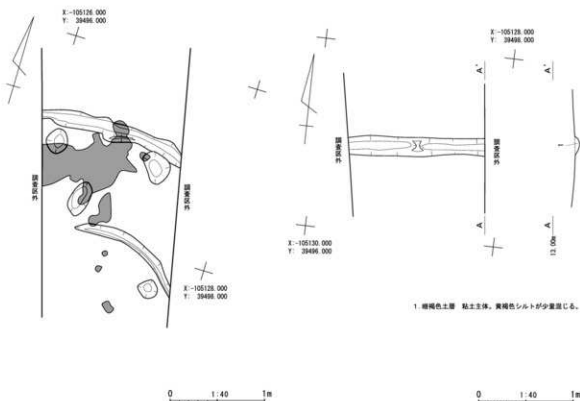
（1）遺構 当該区で検出された遺構は、竪穴建物跡2軒（1・2号竪穴建物跡）及び溝1条（第1号溝）である。

1号竪穴建物跡（第9図）は、調査区の北西端部に位置する。建物南東隅部に当たる箇所と推定されるが、上位攪乱層により明確な竪穴掘方が捉えられないまま掘削を進め、調査区境界壁の土層断面上で存在を把握したものである。貼床と目される数cm幅の黄褐色粘土の水平堆積上及び、小土坑中から土器の集中を見た。検出された遺物より古墳時代前期に比定される。

2号竪穴建物跡（第10図）は、調査区の南部に位置する。平面及び調査区境界壁の土層断面で、複数の竪穴建物北壁に相当する箇所の重複が認められた。建て替えによる掘方重複の結果とみられる。限



第9図 1号竪穴建物跡遺物出土状況図

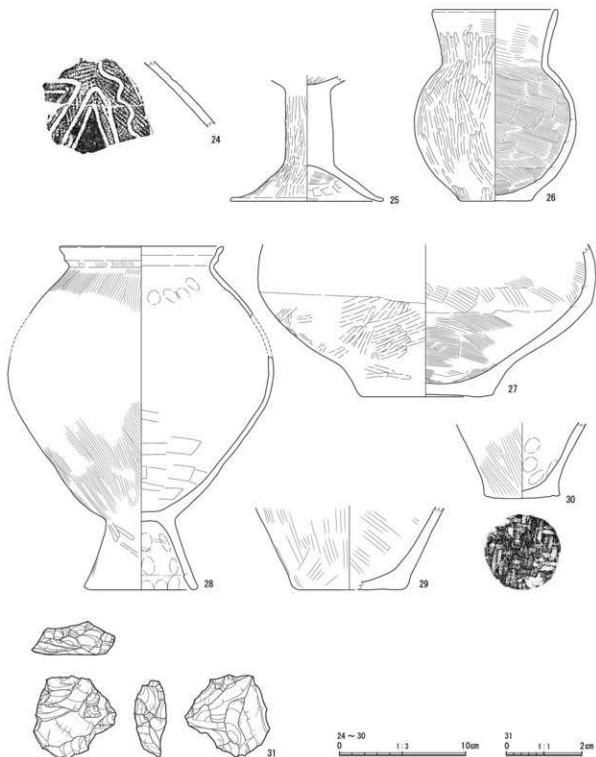


第10図 2号竪穴建物跡平面図

第11図 1号溝平・断面図

定的な焼土の広がりや重なり、竈が壊された痕跡と目される。本報告書中に図示していないが、建物跡覆土最下層に相当する1区土層第3層最下位より灰軸陶器の細片（碗口縁部片）を検出しているため、平安時代に比定される。

1号溝（第11図）は、土層断面の所見より、2号竪穴建物以前の構築と判断される。2号竪穴建物構築により壁部が失われた建物周壁溝残存部である可能性が高い。



第12図 1～2区出土遺物実測図

(2) 遺物 (第12図 24～31)

24は、表土攪乱層より出土した。弥生時代中期に比定される壺の肩部上位に相当する。原体L Rの単節縄文を施した後、竹管外皮を用いて蛇行沈線、三角形の沈線区画を描く。

25～30は、古墳時代前期に比定される土師器で、いずれも1号竪穴建物跡の範囲と推定される箇所から出土した。25は、高坏の皿部下位～底部である。外面は、皿部は、ナデ調整、脚～底部は、縦方向のミガキ調整が施され、内面は、皿部は、ミガキ調整、底部は、中央及び縁部は、ハケ調整、その間隙部には、板ナデ調整が各々横方向に施される。26は、小型壺である。口縁部上位は、内外面ともに横方向のハケ調整の後、ナデ調整を施す。口縁部下位以下の外面は、縦方向のミガキ調整、内面は、横方向のハケ調整が施される。胴中央部に黒斑の痕跡を残す。27は、壺の胴～底部である。胴下位が膨らむ形状を呈し、底部は、中央に向けて、緩やかに凹み、縁部に幅15～17mm程度の高台形状を作出する。胴中位外面は、ナデ調整が施され、胴下位外面は、斜・横方向のハケ調整の後、斜・横方向のミガキ調整が行われる。胴中位内面は、斜方向に先端(櫛先1本あたりの)幅が広めのハケ調整が施され、胴下内外面は、斜・横方向に先端幅が細めのハケ調整が行われる。28は、薄手の台付甕である。口縁部断面は、メリハリの弱いS字を呈す。口縁部下位～胴上位外面は、縦方向、胴下位外面は、斜方向のハケ調整が施され、台部外面は、ハケ調整の後、ミガキ調整が行われている。内面は、胴上位と台部に指頭圧痕を残す。また、同下位部には、横方向の板ナデ調整が施されている。29・30は、甕の胴下位～底部である。ともに平底である。29は、外面に縦・斜方向のハケ調整、内面に斜方向のハケ調整が施され、底面は、ナデ調整される。30は、外面に斜方向のハケ調整が施され、内面は、ナデ調整とともに指頭圧痕が残る。また、底面には、網代痕が残る。

31は、黒曜石製の楔形石器である。上下に打撃に伴う剥離痕が確認される。縄文時代所産の製品と考えられる。

3 2-1区

2区北部に相当する。

(1) 遺構 当該区で検出された遺構は、溝1条(2号溝)、井戸1基(1号井戸)である。

2号溝(第13図)は、N-82°-W(N-98°-E)方向に走る。構築目的は、不明である。南側にテラス状の段が残されていた。

1号井戸(第14図)は、その掘方平面形が六角形を呈する。掘方中位の同深部には、ステップ状のテラスが複数基確認出来る。これは、構造物(固定のため)の痕跡と捉えられる。遺構の内外に井戸構造物を一切残しておらず、覆土がほぼ単層であることから、構造物撤去後、短期間に埋没が行われたものとみられる。底部には、加工痕(第15図34)が立てるようにして掘えられていたが、これは、井戸が廃絶された際に行われた祭祀行為に基づくものとみられる。時代を特定する遺物の検出は、認められなかった。

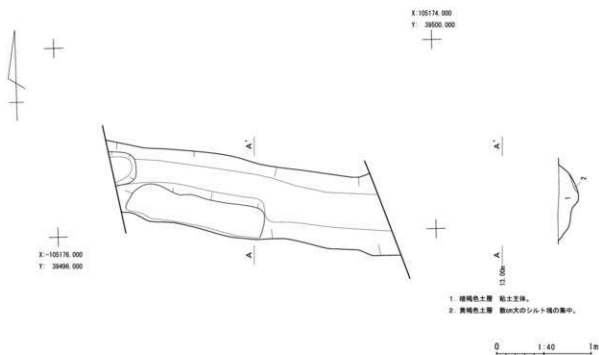
いずれの遺構も、近・現代攪乱層以下にあり、古代遺物包含層(2区第5層)より上位層(2区第2・3層)を覆土としていることから、中・近世に構築・使用された蓋然性が高い。

(2) 遺物 (第15図 32～34)

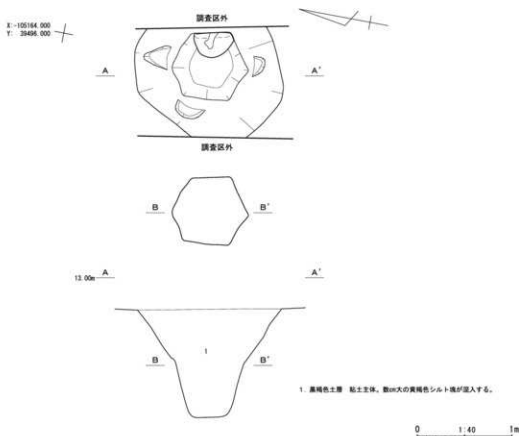
32は、薄手の台付甕の口縁～胴上位である。2区第8層中から出土した。口縁部は、内外面ともに横方向のナデ調整が施され、胴上位外面は、斜方向のハケ調整、内面は、横方向のハケ調整の後、部分的にナデ調整が行われる。古墳時代前期に比定される。

33は、甕の底部である。2区第8層中から出土した。尖底・単孔の特長を持つ。外面は、縦方向のハケ調整がされ、内面は、ハケ調整の後、ナデ調整が行われている。古墳時代の所産か。

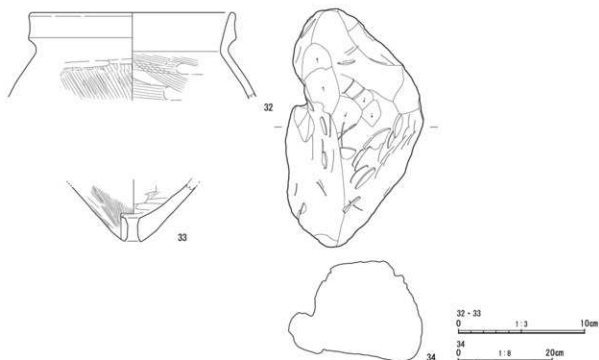
34 は、凝灰岩製の加工鏝である。1号井戸底部より出土した。長径 50.5 cm、重量 15.57 kg。元からあったと考えられる凹み部以外の表面は、幅広の鑿状工具で粗く整形される。



第13図 2号溝平・断面図



第14図 1号井戸平・断面図



第15図 2-1区出土遺物実測図

4 2-2区

2区南部に相当する。小開析・沢と目される落ち込みからの出土物は、西側調査区外（丘陵部側）からの流れ込みである可能性が高い。

(1) 遺構 当該区で明確な遺構は、検出されていない。

(2) 遺物 (第16図 35～46)

35～39は、調査区北部の落ち込み（第6層）よりまとまって出土した。いずれも古墳時代に比定される土師器である。

35は、小型の鉢である。外面は、縦方向のミガキ調整、内面は、ナデ調整が施される。36は、台付甕の胴下位～台中位である。外面は、ナデ調整が行われ、胴一台間屈折部には、縦方向のハケ調整痕が残る。また、胴底内面、台中位内面は、横方向のハケ調整、台上位内面は、指頭痕の残るナデ調整がされる。37は、器台の皿底～台部である。台中位に3箇所、径1.2cm程度の円孔が開けられる。皿底部外面は、ミガキ調整、台外面は、最上位の皿一台接合箇所近接屈折部には、縦方向のハケ調整痕が残すが、全般に縦方向のミガキ調整が行われ、さらに上位と下位に横方向のミガキ調整が施される。38は、小型の甕の口縁から頸部である。口唇部及び内面は、横方向のハケ調整、外面は、縦方向のハケ調整が行われる。39は、甕の口縁から胴上位である。口唇部及び内面は、横方向のハケ調整、外面は、縦方向のハケ調整が行われた後、散漫に横方向の棒状工具によるナデ調整が内外面共に行われる。

40・41・43・44・46は、調査区中央以南の落ち込み（第5層）より出土した。

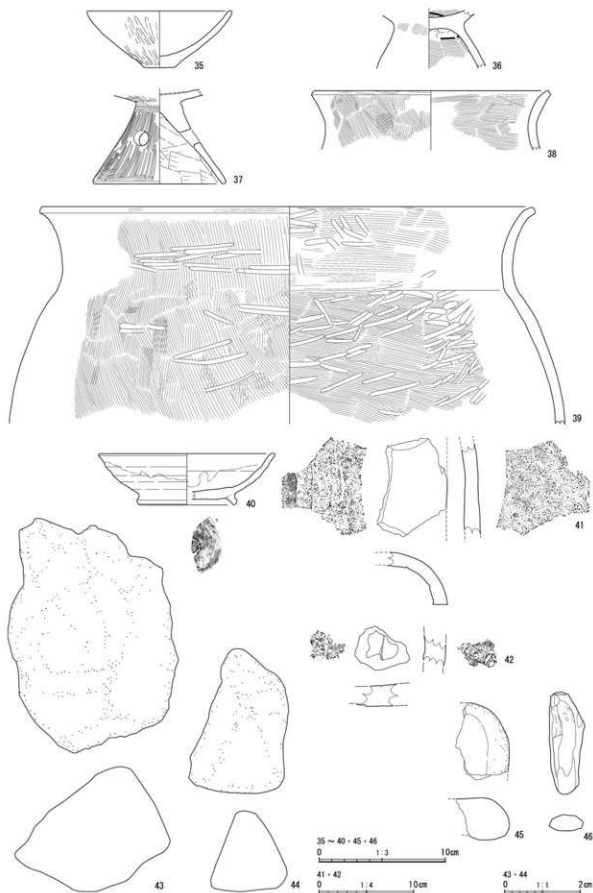
40は、灰釉陶器の碗である。内面には、一部重ね焼き痕である薄い欠損剥落が認められる。底面は、ヘラ削りした後、多角形の窯記号がヘラ描きされている。内外面共に口縁から体部中位で不均一に施軸がされている。折戸53号窯式並行期に比定されるものか。

41・42は、古代瓦である。両者とも胎土に径1mm以下の白色粒子を含む特徴から、近在の花坂古窯群産の製品と目される。41は、丸瓦である。縁部は、面取りされ、内面には、布目痕が残る。外面色調は、黄灰色を呈す。42は、表面採取品である。平瓦片で布目痕が残る。色調は、橙色を呈す。

43・44 は、黒曜石原礫で、産地は、不明である（第5章参照）。表面原礫面に著しい流磨痕を残す亜円礫であるため、元々の採取場所は、河川中・下流域から海岸部と推定される。石基部のガラス光沢は、十分観察されるものの、黒色で透明度は、低く、白・灰色の斑晶を豊富に含む。割ることを試みた痕跡は、肉眼上、観察されない。採取時期は、縄文時代と推定される。なお、図示していないが、これより小形の原礫も複数検出されている。

45 は、表面採取品である、安山岩製の磨石である。平坦部に使用痕跡を残す。縄文時代の所産か。

46 は、砂岩製の砥石である。全体的に被熱による赤化変色が認められる。縁部に使用痕跡を残す。具体的な年代観は、特定出来ないが、41 に近隣して出土しており、古代以降の所産と考えられる。



第16図 2-2区出土遺物実測図

第2表 出土土器観察表

標記 番号	調査区	調査区	遺構名	種類	器種	残存部位	残存率 (%)	口径 (mm)	最大径 (mm)	底径 (mm)	色調	時期	備考
1	図版5	1-1		弥生土器	甕	胴部	-	-	-	-	10YR 6/4 にぶい黄褐色	弥生時代中期	表土層乱層中より出土
2	図版5	1-1		弥生土器	甕	胴部上位	-	-	-	-	10YR 5/3 にぶい黄褐色	弥生時代中期	表土層乱層中より出土
24	図版5	1-2		弥生土器	甕	胴部上位	-	-	-	-	7.5YR 6/6 褐色	弥生時代中期	表土層乱層中より出土
25	図版5	1-2	1号型穴埴輪跡	土師器	高坏	直胴下位 ～底部	60	-	-	(122)	7.5YR 6/4 にぶい褐色	古墳時代前期	
26	図版5	1-2	1号型穴埴輪跡	土師器	小笠形	全体	60	(190)	-	58	5YR 5/4 にぶい赤褐色	古墳時代前期	
27	図版5	1-2	1号型穴埴輪跡	土師器	甕	胴部 ～底部	40	-	26	108	5YR 7/6 褐色	古墳時代前期	
28	図版5	1-2	1号型穴埴輪跡	土師器	台付甕	全体	40	(130)	-	90	7.5YR 6/4 にぶい褐色	古墳時代前期	
29	図版5	1-2	1号型穴埴輪跡	土師器	甕	胴部下位 ～底部	30	-	-	(91)	10YR 6/4 にぶい黄褐色	古墳時代前期	
30	図版5	1-2	1号型穴埴輪跡	土師器	甕	胴部下位 ～底部	100	-	-	(60)	7.5YR 6/4 にぶい褐色	古墳時代前期	
32	図版6	2-1		土師器	台付甕	口縁部 ～胴部上位	10	(164)	-	-	7.5YR 5/4 にぶい褐色	古墳時代前期	
33	図版6	2-1		土師器	甕	底部	-	-	-	-	7.5YR 6/4 にぶい褐色	古墳時代	
35	図版7	2-2	調査北部落ち込み	土師器	小型鉢	全体	45	(116)	-	24	5YR 7/6 褐色	古墳時代	
36	図版7	2-2	調査北部落ち込み	土師器	台付甕	胴部下位 ～中部中位	50	-	-	-	5YR 5/3 にぶい赤褐色	古墳時代前期	
37	図版7	2-2	調査北部落ち込み	土師器	器台	直胴下位 ～台部	75	-	-	108	5YR 6/6 褐色	古墳時代前期	
38	図版7	2-2	調査北部落ち込み	土師器	小型甕	口縁部 ～底部	20	(190)	-	-	10YR 7/4 にぶい黄褐色	古墳時代	
39	図版7	2-2	調査北部落ち込み	土師器	甕	胴部 ～胴部上位	15	(390)	-	-	7.5YR 6/4 にぶい褐色	古墳時代	
40	図版7	2-2	調査中央以南 落ち込み	灰緑陶器	甕	全体	25	(140)	-	79	N7/ 灰白色	平安時代	底面に多角形の窯記号
41	図版7	2-2	調査中央以南 落ち込み	瓦	丸瓦		-	-	-	厚14	2.5YR 6/1 褐色	古代	
42	図版7	2-2		瓦	平瓦		-	-	-	厚22	2.5YR 6/6 褐色	古代	表土層乱層中より出土

第3表 出土石器観察表

標記 番号	調査区	調査区	遺構名	材質	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚み (mm)	重量 (g)	時期	備考
31	図版5	1-2		黒曜石 (神津島系黒曜岩)	楔形石器	21.5	21.5	4.5	3.8	縄文時代	表土層乱層中より出土
34	図版6	2-1	1号井戸	凝灰岩	加工塊	505	282	21.5	1557.9	中近世	
43	図版7	2-2	調査区中央以南 落ち込み	黒曜石 (産地不明)	厚板	62	43	30	22.4	縄文時代	
44	図版7	2-2	調査区中央以南 落ち込み	黒曜石 (産地不明)	厚板	38	25	21	91.7	縄文時代	
45	図版7	2-2		安山岩	磨石	(61)	(42)	33.5	(92.4)	縄文時代	表面採取
46	図版7	2-2	調査区中央以南 落ち込み	砂岩	砥石	81	28	13	39.9	古代以降	被熱による変色

第4表 出土錢貨觀察表

排圖 番号	錢名	書体	初鑄進年	発行 王朝	外径 (mm)	孔徑 (mm)	洗淨処理後 重量 (g)	備考
3	太平通寶		976 年	北宋	24.0	6.0	3.9	磨銭順 11 表向
4	聖道元寶	行書	995 年	北宋	24.0	6.5	3.1	磨銭順 5 裏向
5	祥符元寶		1008 年	北宋	24.0	6.0	3.2	磨銭順 21 裏向
6	祥符通寶		1009 年	北宋	24.0	6.5	3.1	磨銭順 14 表向
7	天聖元寶	真書	1023 年	北宋	24.0	7.5	2.8	磨銭順 3 裏向
8	天聖元寶	真書	1023 年	北宋	24.0	7.0	3.2	磨銭順 17 裏向
9	景祐元寶	真書	1034 年	北宋	24.0	8.0	3.6	磨銭順 16 裏向
10	皇宋通寶	篆書	1039 年	北宋	24.0	7.5	2.9	磨銭順 18 裏向
11	治平元寶	篆書	1064 年	北宋	24.0	6.5	3.8	磨銭順 12 裏向
12	熙寧元寶	篆書	1068 年	北宋	24.0	7.0	2.0	磨銭順 9 表向
13	元豐通寶	篆書	1078 年	北宋	23.5	7.0	3.6	磨銭順 2 裏向
14	元豐通寶	篆書	1078 年	北宋	23.5	7.0	3.8	磨銭順 19 裏向
15	元祐通寶	真書	1086 年	北宋	24.0	6.0	3.3	磨銭順 20 裏向
16	紹聖元寶	篆書	1094 年	北宋	24.0	6.5	3.6	磨銭順 1 表向
17	淳熙元寶		1174 年	南宋	23.0	6.5	3.3	磨銭順 6 表向 背 上月・下星
18	永樂通寶		1408 年	明	24.5	6.0	3.1	磨銭順 4 裏向
19	永樂通寶		1408 年	明	24.5	6.0	3.0	磨銭順 7 表向
20	永樂通寶		1408 年	明	24.5	6.0	4.0	磨銭順 8 表向
21	永樂通寶		1408 年	明	24.5	6.0	3.6	磨銭順 10 表向
22	永樂通寶		1408 年	明	24.5	6.0	2.9	磨銭順 13 裏向
23	永樂通寶		1408 年	明	24.5	6.0	3.3	磨銭順 15 裏向

第4章 まとめ

第1節 江間微高地上の遺跡の展開について

周辺遺跡立地については、第2章第2節で示したとおりであるが、今回の調査成果を踏まえ、より限定的に大男山北東麓部の狩野川中流左岸自然堤防上の遺跡の展開について言及する。

1 縄文時代

1-2区、2-2区より縄文時代の所産と推定される石器（第12図31、第16図45）及び石器原料となる石材塊（第16図43・44）が発見されている。しかし、当該区の調査対象となった層位の堆積時期が明らかに縄文時代より後に当たると考えられるため、これら遺物は、調査区外部からの流れ込みと目される。それら遺物の埋没原位置となり得るのは、標高位が調査区より優位である西側丘陵（巨徳山一谷戸山尾根稜部）であり、その東裾部に形成された開析谷・沢の内側を流れて、調査区にもたらされたと考えるのが自然で、未知の縄文時代遺跡の存在が想定される。

2 弥生時代

遺構は、未検出であるが、1区にて弥生時代中期に比定される土器片（第8図1・2、第12図24）が発見された。土器は、石材より比重が軽く、洪水等の影響により流動しやすい遺物と言えるが、今回調査で出土した、これら弥生土器片の周縁及び表面には、目立った流磨痕跡が認められなかったため、二次堆積に伴う移動距離や負荷された圧力は、小さかったものと判断される。よって、同時代の集落跡が今回調査区周辺（北側にある町田遺跡、窯の段遺跡未調査区）に存在すると考えられる。

3 古墳時代

1-2区北部にて、古墳時代前期に比定される堅穴建物とそれに伴う遺物集中が確認された。花ノ木遺跡から連続する古墳時代集落の展開が、当該箇所まで及ぶことが明らかとなった。

4 古代

1-2区南部にて、平安時代に比定される堅穴建物の建て替え重複が確認された。町田遺跡から連続する古代集落の展開が、当該箇所まで及ぶ。

2-2区中央以南の落ち込みにて、灰釉陶器の碗（第16図40）及び瓦片（同41）が出土しているが、縄文時代遺物同様、西側調査区外からの流れ込みと考えられる。出土した瓦片は、小さく、かつ少数であり、その存在は、古代寺院建物の存在を示すというよりも、堅穴建物の竈部等の芯材や煙道補強材といった部材利用のために、近隣の寺院または、焼成窯から、破損した廃棄品や未使用品が持ち込まれたものと考えられる。

第2節 吉祥寺廃寺推定所在地周辺の地割と遺構配置について

今回の発掘調査では、中・近世に比定される遺構として、溝（2号溝）、井戸（1号井戸）、土坑（1号土坑）が検出されている。これらの配置状況と吉祥寺との関係性について述べる。

調査区の周辺には、近世から残ることが確実で、当該地区にとって主要な道路と認識される、静岡県道 129 号 菰山伊豆長岡修善寺線と伊豆の国道道長 206 号線（「長」は、旧伊豆長岡町の意）が南北方向に走る。

西側を走る県道菰山伊豆長岡修善寺線の前身道路（以下、江間微高地西幹線または、西幹線と表記する）は、江間用水（南江間分水以北は、北江間村内堀）沿いに作られた道路であり、その成立時期は、江間用水構築時期（1655 年）の前後と推定される。

東側を走る市道長 206 号線は、さらに北側で市道長 1014 号線に繋がって、江間微高地のほぼ中央を縦貫する道路であり、その前身道路（以下、江間微高地東幹線または、東幹線と表記する）は、この地域に残る最も古い南北通行幹線である可能性が高い。その南端は、直接、堀之上―古奈―長岡―小坂方面に抜けず、西折し、熊野八坂神社へと向かう。

第 5 表は、今回調査区周辺で延宝 6（1678）年の南江間村絵図（津田家文書）にも描かれていた（＝1678 年には、存在している）道路の後身に当たり、先述の 2 幹線に対して支線機能を持つと考えられる、東西方向に走る伊豆の国道道の平面主軸角度を記したものである。

道路の方向は、道路が成立した時代の周辺土地利用・地割が反映されると考えられるが、西幹線に交叉する道路と東幹線に東側から合流する道路の平面主軸角度は、各々、異なる傾向を示す。

東漸寺、北條寺の門前から東へ延びる道路（市道長 2055 号線＋2033 号線西部、2026 号線＋207 号線西部）は、北から 80° 前後東側に傾く方向に主軸がある。これらの道路は、西幹線とほぼ直交する。この配置は、西幹線の完成後、これに合わせて方向が設定された結果とみられ、その成立は、1655 年以降と考えられる。

これに対し、北條寺の南側尾根を越えた比較的広い谷戸や熊野八坂神社から東へ延びる道路（市道長 2027 号線、2029 号線）は、北から 90° 前後東側に傾く方向に主軸がある。これらは、東幹線に対し、ほぼ垂直にぶつかる（市道長 2029 号線は、東幹線南端が直角に西折した道路の延長と捉えられる）。東幹線を基準に方向が決定したこれらの道路配置の成立は、西幹線基準の道路配置に先行していたと考えられ、廃絶前の吉祥寺もこの土地区画に沿っていた可能性が高い。

江間用水の分水地点が、ほぼ 2027 号線と重なるのも、従来の土地区画上にあった道路の利用として、工事起点となったと考えて良いだろう。

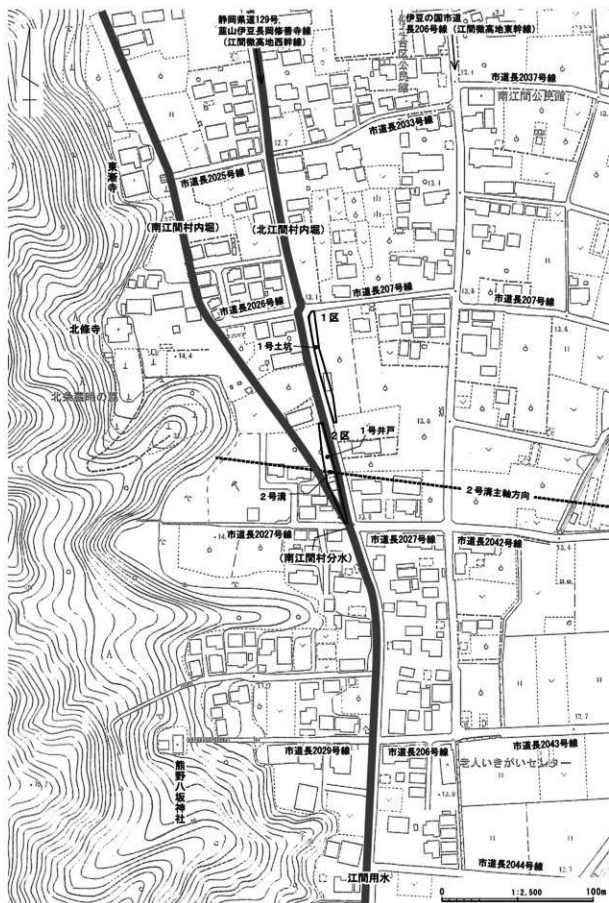
東幹線に東側から合流する、市道長 2037 号線西部、207 号線、2042 号線西部の各道路は、 $92 \sim 96^\circ$ 東側傾斜する向きを持つ。東幹線以西の現地表面上には、これと同じ向きの土地区画は、認められないが、2-1 区で検出された 2 号溝は、 98° 東側傾斜と、東幹線以東の道路に近似する向きをみせている。かつて、この向きの土地区画が西側丘陵の裾野まで及んでいた可能性を示唆するものである。ただし、その成立年代を特定する記録や遺物の検出実績は、皆無である。

土地区画東西軸の変遷についてまとめると、北方向を基準に見た場合、①右肩下がり（ 90° 台東側傾斜）→②東西水平（ 90° 前後東側傾斜。東幹線基準）→③右肩上がり（ 80° 前後東側傾斜。西幹線基準。1655 年以降）の 3 段階が捉えられる。

中・近世に比定される各検出遺構について、2 号溝は、先述のとおり①段階、方形または、長方形の平面形を呈するとみられる 1 号土坑は、残存する東辺の平面主軸角度が $N-8^\circ - W$ で、北・南辺は、これに直交する方向（ 90° 展開すると $N-82^\circ - E$ ）となることから、③段階で設定されたものと考えられ、吉祥寺の施設を構成していた遺構とならない可能性が高い。

1 号井戸は、その平面形が六角形をしているため、その形状、辺の方向から、それに合致する土地区画を特定することが出来ないため、その立地から時期を考えなければならない。

1 号井戸は、江間用水南江間分水の直北約 50 m の箇所に位置する。東側を流れる北江間村内堀と西



第17図 中・近世道構配置・現在土地区画比較図

側を流れる南江間内堀に挟まれた当該地の幅は、10 m程度と比較的狭小である。発掘調査着手以前は、畑地であり、耕地として利用が継続していたようである。

用水完成により農業水確保がされた当地に、新たに井戸を設ける合理的理由は、見当たらないため、その構築・利用時期は、用水完成以前と推察される。すなわち、1号井戸は、吉祥寺の施設であった可能性が高い。

第5表 周辺道路平面角度一覧表

静岡県道129号星山伊豆長岡修善寺線交叉道路			伊豆の国市道長206号線東側合流道路	
(東隣寺側)	市道長2055号線・ 同2033号線西部	N-77°-E	市道長2037号線西部	N-92°-E
(北隣寺側)	市道長2026号線・ 同207号線西部	N-81°-E	市道長207号線	N-94°-E
(比較的広い谷戸側)	市道長2027号線	N-91°-E	市道長2042号線西部 (市道長206号線西部側)	N-96°-E
(熊野八坂神社側)	市道長2029号線	N-90°-E	市道長2043号線 (水路以西 市道長2044号線)	N-87°-E N-95°-E

第3節 中世緞銭の構成について

1-1区攪乱土に含まれていた、中世に比定される緞銭は、21枚の渡来銭から成る。いずれも銅製の小平銭で、最古銭は、太平通寶(初鑄976年)、最新銭は、永楽通寶(同1408年)であり、永楽通寶の構成比が比較的高い(21枚中6枚、28.57%)ため、当該銭貨流通量がある程度高まった、15世紀中葉を上限とし、寛永通寶(初鑄1636年)の十分な流通以前(17世紀中葉)に遺失・埋没したと考えられる。銭孔内には、一部、繊維の痕跡が認められ、縄紐により銭貨が繋がれていたことが分かる。

表6は、重なる銭貨の片方の端を1番目、もう片方の端を21番目と定め、その順番の中の構成を示したものである。銭貨の並びについて、特定銭種・書体の偏りは、特に無いものの、各銭貨の表裏の向きについて、以下の内容が認められた。

ある程度の枚数の向きが同一となる小塊がみられ、4枚組、5枚組、6枚組が各1セットずつ存在した。セットの内容数は、バラバラであり、全てのセットの方向も合わせようとした形跡も無いので、この緞銭を作った者が意図して組んだものではないと判断される。

小塊が発生した原因は、当該緞銭が組まれる前段階で、表裏の向きが整えられた別の緞銭の中から、数枚に渡って、少額の支払受取等の移動・集合があり、それが緩慢にまとめられたことで、このような様相を呈することになったと考えられる。

緞銭内で、全ての銭貨の表裏の向きを整えることに意味があるとすれば、それは、銭名確認を容易にすることであり、撰銭行為の簡易・時短化、または、完了を示すためであっただろう。

第6表 緞銭構成表

順	銭名	書体	初鑄年	発行年	掲載番号	向き	向きの連続
1	紹聖元寶	篆書	1094	北宋	第8図16	表	1枚
2	元豊通寶	篆書	1078	北宋	第8図13	裏	
3	大聖元寶	行書	1023	北宋	第8図7	裏	4枚
4	永楽通寶		1408	明	第8図18	裏	
5	崇寧元寶	行書	995	北宋	第8図4	裏	
6	淳熙元寶		1174	南宋	第8図17	表	
7	永楽通寶		1408	明	第8図19	表	
8	永楽通寶		1408	明	第8図20	表	6枚
9	熙寧元寶	篆書	1068	北宋	第8図12	表	
10	永楽通寶		1408	明	第8図21	表	
11	太平通寶		976	北宋	第8図3	表	

順	銭名	書体	初鑄年	発行年	掲載番号	向き	向きの連続
12	治平元寶	篆書	1064	北宋	第8図11	裏	2枚
13	永楽通寶		1408	明	第8図22	裏	
14	祥符通寶		1099	北宋	第8図6	表	1枚
15	永楽通寶		1408	明	第8図23	裏	1枚
16	景祐元寶	行書	1034	北宋	第8図9	表	1枚
17	大聖元寶	行書	1023	北宋	第8図8	裏	
18	皇宋通寶	篆書	1039	北宋	第8図10	裏	
19	元豐通寶	篆書	1078	北宋	第8図14	裏	5枚
20	元祐通寶	行書	1096	北宋	第8図15	裏	
21	祥符元寶		1098	北宋	第8図5	裏	

第5章 吉祥寺廃寺出土の黒曜石製石器の 産地推定

1 はじめに

伊豆の国市南江間に所在する吉祥寺廃寺は、狩野川左岸の自然堤防上に立地し、南北朝時代に創建され江戸時代初期には廃絶した寺院跡である。遺跡より出土した黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

2 試料と方法

分析対象は、第7表に示す5点の黒曜石製石器である。調査では、楔形石器や剥片といった加工した痕跡の残る石器は2点（分析No.1、2）のみで、ほかには原礫が5～6点（分析No.3～5を含む）出土している。原礫は、いずれも石基は黒色ガラス質だが斑晶が非常に多い。一般的に黒曜岩は、無斑晶質で斑晶はわずかに含む程度であり、本試料は流紋岩に近い。石器の時期は、縄文時代とみられている。

試料は、測定前に超音波洗浄器やメラミンフォーム製スポンジを用いて、測定面の表面の洗浄を行った。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム(Rh)、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000μA、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

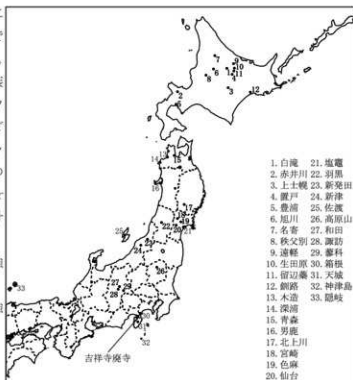
黒曜石の産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた（望月1999など）。本方法では、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素のX線強度(cps:count per second)について、以下に示す指標値を計算する。

- 1) $Rb \text{ 分率} = Rb \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$
- 2) $Sr \text{ 分率} = Sr \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$
- 3) $Mn \text{ 強度} \times 100 / Fe \text{ 強度}$
- 4) $\log(Fe \text{ 強度} / K \text{ 強度})$

そして、これらの指標値を用いた2つの

第7表 分析対象

分析No.	取上番号	器種等
1	1JK-77	楔形石器
2	1JK-73	剥片
3	1JK-87①	原礫
4	1JK-87②	原礫
5	1JK-87③	原礫



第18図 黒曜石産地分布図（東日本）

判別図（横軸 Rb 分率－縦軸 Mn 強度×100/Fe 強度の判別図、横軸 Sr 分率－縦軸 log(Fe 強度 / K 強度) の判別図）を作成し、各地の原石データと遺物のデータを照合して、産地を推定する。この方法は、できる限り蛍光 X 線のエネルギー差が小さい元素同士を組み合わせて指標値を算出するため、形状、厚み等の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊分析が望ましい考古遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。ただし、風化試料の場合、log(Fe 強度 / K 強度) の値が減少する（望月 1999）。試料の測定面には、なるべく平滑な面を選んだ。原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。第8表に判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を、第18図に各原石の採取地の分布図を示す。

3 分析結果

第9表に石器の測定値および算出した指標値を、第19図と第20図に黒曜石原石の判別図に石器の指標値をプロットした図を示す。視覚的にわかりやすくするために、図では各判別群を楕円で取り囲んだ。

分析の結果、分析 Na 1 が恩馳島群（東京都、神津島エリア）、分析 Na 2 が柏峠群（静岡県、天城エリア）の範囲にプロットされた。分析 Na 3～5 の原礫は、合致する判別群がなく産地不明であったが、互いに近い位置にプロットされており、同一産地である可能性が高いと考えられる。ここでは仮に、不明 1 群とした。

第9表に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。

第8表 東日本黒曜石産地の判別群

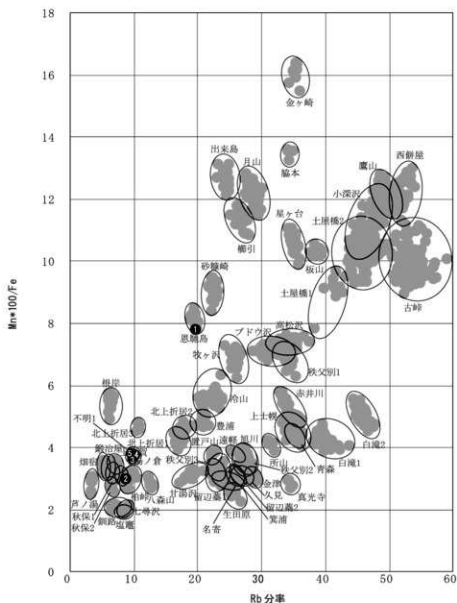
都道府県	エリア	判別群名	産石採取地
北海道	白岡	白岡 1	赤石山山頂 (43)、八号沢産 (15)
		白岡 2	7 の沢川支流 (2)、1 号沢 (10)、十勝石炭露頭直下河床 (11)、アグサイの滝産 (16)
	赤井川	赤井川	赤石山山頂、八号沢産 (15)
	上土幌	上土幌	十勝二股 (40)、タウシユヅ川右岸 (42)、タウシユヅ川左岸 (10)、十三ノ沢 (32)
	戸山	戸山	戸山 (5)
	戸山	戸山	戸山 (5)
	豊満	豊満	豊満 (10)
	旭川	旭川	近文台 (8)、田舎台 (2)
	名寄	名寄	忠恵町川 (19)
	秋田	秋田 1	中山 (65)
		秋田 2	
		秋田 3	
	湯沢	湯沢	社名南川河床 (2)
	生田原	生田原	仁田南川河床 (10)
	留辺蘆	留辺蘆 1	ケシマツ川河床 (9)
		留辺蘆 2	
青森	御路	御路	御路谷沢スキー場 (9)、阿瀬川右岸 (2)、阿瀬川左岸 (6)
	木造	木造	出来島産 (15)、鶴ヶ坂 (10)
	八森山	八森山	岡崎産 (7)、八森山公園 (8)
	青森	青森	天田内川 (46)
	金ヶ崎	金ヶ崎	金ヶ崎温泉 (10)
岩手	北上折居 1	北上折居 1	北上川 (9)、真盛 (33)
	北上折居 2	北上折居 2	
	北上折居 3	北上折居 3	
宮城	宮崎	宮ノ首	宮ノ首 (40)
	色麻	色麻	色麻 (40)
	秋保 1	秋保 1	土蔵 (18)
	秋保 2	秋保 2	
山形	塩竈	塩竈	塩竈 (10)
	月山	月山	月山荘前 (24)、大越沢 (10)
	鶴引	鶴引	たらのぎ代 (19)
	板山	板山	板山牧場 (10)
新潟	金津	金津	金津 (7)
	真光寺	真光寺	真光寺 (4)
	甘藷沢	甘藷沢	甘藷沢 (22)
	七尋沢	七尋沢	七尋沢 (3)、宮川 (3)、枝持沢 (3)
長野	西勝郷	西勝郷	美音バーライト土砂堆積層 (30)
	鹿山	鹿山 (14)、東新屋 (54)	小深沢 (42)
	小深沢	小深沢	
	土屋橋 1	土屋橋 1	新和田トンネル北 (20)、土屋橋北西 (50)、土屋橋西 (1)
	土屋橋 2	土屋橋 2	
	古峠	古峠	和田峠トンネル北 (20)、古峠 (38)、和田峠スキー場 (38)
	ブドウ沢	ブドウ沢	ブドウ沢 (20)
	牧ヶ沢	牧ヶ沢	牧ヶ沢下 (20)
	高松沢	高松沢	高松沢 (19)
	諏訪	星ヶ台	星ヶ台 (30)、星ヶ塔 (20)
神奈川	赤山	赤山	赤山 (20)、美草峠 (20)、美草峠東 (20)
	戸ノ瀬	戸ノ瀬	戸ノ瀬 (20)
	鎌倉	鎌倉	鎌倉 (51)
	鍛冶屋	鍛冶屋	鍛冶屋 (20)
	上多賀	上多賀	上多賀 (20)
静岡	天城	天城	天城 (20)
	恩馳島	恩馳島	恩馳島 (27)
東京	砂塚崎	砂塚崎	砂塚崎 (20)
	久見	久見	久見バーライト中 (6)、久見保能産 (5)
高根	関地	関地	関地 (20)

第9表 測定値および産地推定結果

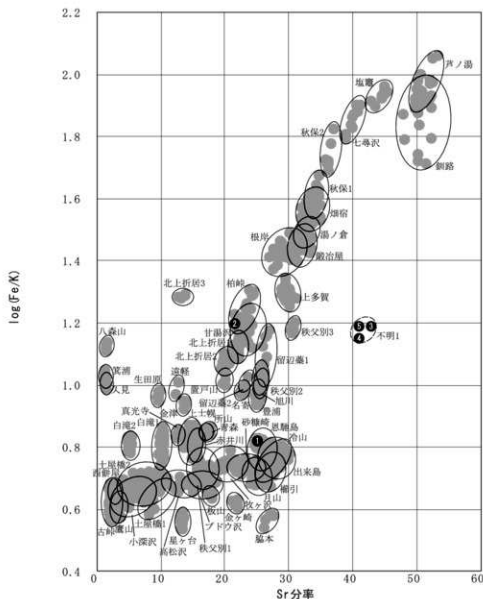
分析 No	K 強度 (cps)	Mn 強度 (cps)	Fe 強度 (cps)	Rb 強度 (cps)	Sr 強度 (cps)	Y 強度 (cps)	Zr 強度 (cps)	Rb 分率	Mn×100 Fe	Sr 分率	log Fe K	判別群	エリア	報告番号
1	224.6	116.2	1487.4	425.0	544.0	342.6	964.2	19.53	7.81	25.00	0.82	恩馳島	神津島	第12図 31
2	176.6	84.1	2799.3	293.4	693.9	428.7	1838.0	8.74	3.01	21.39	1.20	柏峠	天城	—
3	188.6	106.2	2923.3	326.2	1424.7	253.3	1322.3	9.81	3.63	42.83	1.19	不明 1	不明	第16図 43
4	185.9	100.1	2642.3	333.5	1355.8	259.3	1355.2	10.09	3.79	41.04	1.15	不明 1	不明	第16図 44
5	103.0	61.1	1598.6	188.7	803.9	161.3	808.1	9.62	3.82	40.97	1.19	不明 1	不明	—

4 おわりに

吉祥寺廃寺より出土した黒曜石製石器5点について、蛍光X線分析による産地推定を行った結果、1点が神津島、1点が天城エリア産と推定された。残り3点は産地不明であったが、同一産地である可能性が高い。



第 19 図 黒曜石産地推定判別図 1



第20図 黒曜石産地推定判別図2

引用・参考文献

第1～4章

- 伊豆長岡町 1983 『町史資料』第2集（宗教編）
 伊豆長岡町教育委員会 1996 『伊豆長岡町史』上巻
 伊豆長岡町教育委員会 2000 『伊豆長岡町史』中巻
 伊豆長岡町史跡名勝調査委員会 1973 『伊豆長岡町の史跡及び名勝』
 財団法人駿府博物館附属静岡県埋蔵文化財調査研究所 1983 『ハツ島遺跡』
 静岡県教育委員会 1986 『駿河・伊豆の横穴群』
 静岡人類学研究所編 1994 『花坂島古窯址発掘調査報告書』伊豆長岡町教育委員会
 長野康敏・鈴木敏中 2001 『伊豆の横穴群』静岡県考古学会 2000 年度シンポジウム実行委員会
 藍山町史編纂委員会 1995 『藍山町史』第10巻（通史1 自然・原始・古代・中世）

第5章

- 望月明彦 1999 「上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定」『埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書
 2—上和田城山遺跡篇—』大和市教育委員会

写真図版



1 1-1区全景 (画面上が北)



2 1-2区全景 (画面上が北)



1 2-1区全景 (画面上が北)



2 2-2区全景 (画面上が南)

図版 3



1 1-2区 2号竪穴建物跡、1号溝（南西から）



2 1-2区 1号竪穴建物跡遺物出土状況（南東から）



3 1-2区 1号竪穴建物跡床面検出状況（南東から）



4 1-1区 1号土坑覆土堆積状況（北東から）



1 1-1区1号井戸完掘状況（西から）



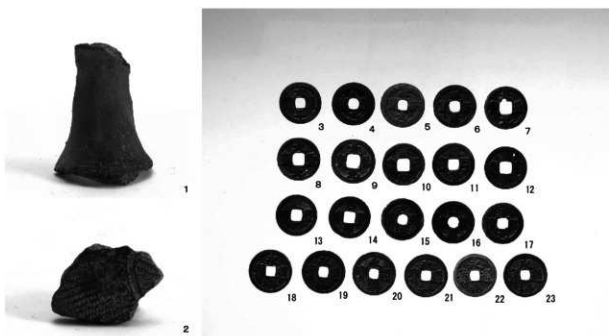
2 2-1区1号井戸内ステップ状掘り込み（西から）



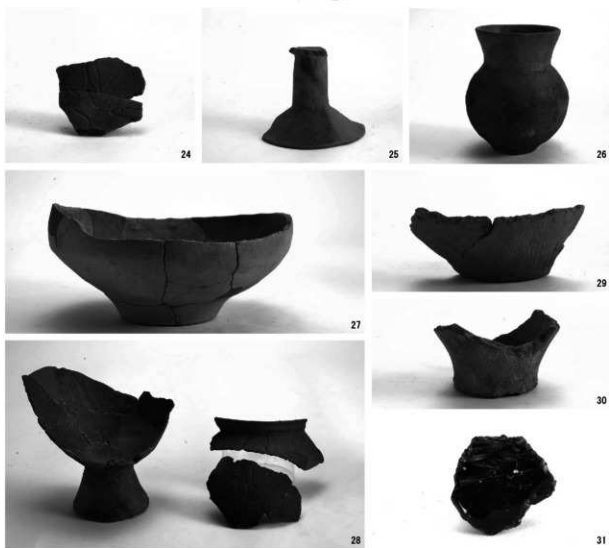
4 2-1区2号清完掘状況（南東から）



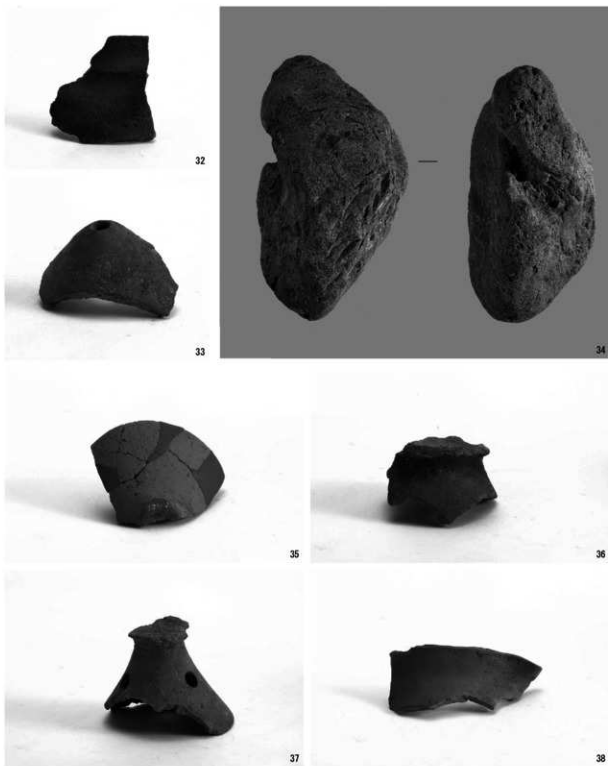
3 2-1区1号井戸内ステップ状掘り込み（南西から）



1—1区出土遗物



1—2区出土遗物



2-1区出土遗物



報告書抄録

[illegible]

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第75集

吉祥寺廃寺

伊豆の国市

令和5・6年度一般県道菰山伊豆長岡修善寺線社会資本整備総合交付金

(県道道路改変・一般) 事業伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

令和7年3月31日発行

編集・発行 静岡県埋蔵文化財センター

〒421-3203 静岡県静岡市清水区蒲原 5300-5

TEL 054-385-5500 (代)

FAX 054-385-5506

印刷所 中部印刷株式会社

〒432-8052 静岡県浜松市中央区東若林町1516番地の2

TEL 053-441-2431

FAX 053-441-7612